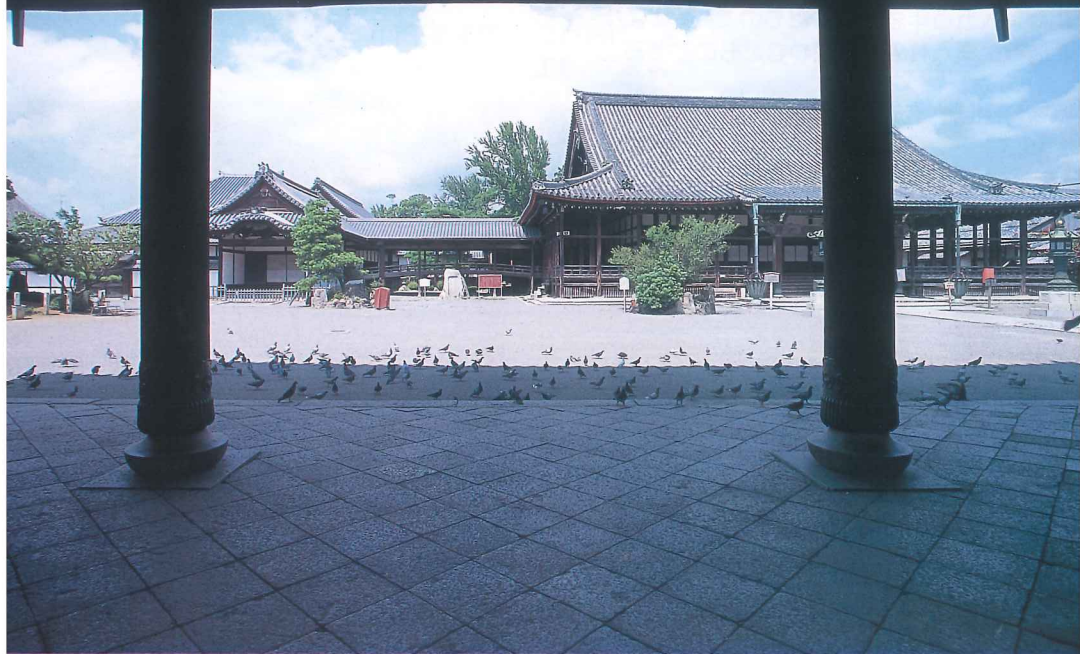


真宗大谷派

長浩別院
大通寺



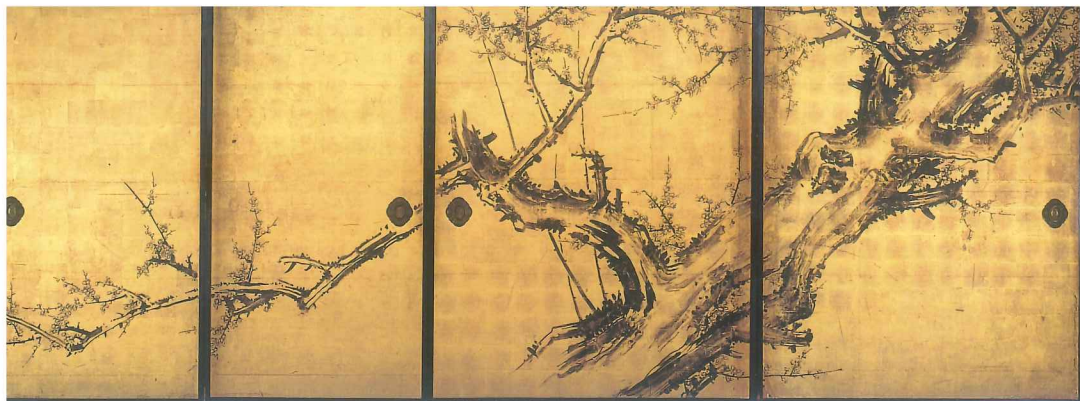


戦国時代のはじめ、浄土真宗の中興の祖と仰がれた蓮如上人は、他力念仏の教えをひろげるため、全国各地を遊化されました。近江国はその布教活動の最大の拠点であつた上、元来信仰心の篤い土地柄でもあつたため蓮如上人の教えは、またたくまに近江全域にひろがつてゆきました。なかでも、坂田、浅井、伊香の湖北三郡は、真宗王国とよばれるほどまでに教線をひろげてゆきました。その湖北三郡の真宗寺院の中核、それが「長浜の御坊さん」とよばれて湖北の人々に親しまれている大通寺です。

天正時代のはじめ頃、湖北三郡の僧俗が、織田信長と戦う大坂の石山本願寺支援の協議を行うため、長浜の町なかに寄合道場を設置したのが、当寺の濫觴といわれています。天正八年（一五八〇）三月、時の本願寺法主顕如上人と、信長の間に和睦が成立しますが、法主の嫡男の教如上人は、徹底抗戦を主張して諸国に檄を発しました。教如上人への帰依親昵の情の深かつた湖北の門徒は、これに応じ、教如上人とともに戦いました。

慶長七年（一六〇二）、教如上人は、徳川家康より本願寺分立の許可を得て、大谷派本願寺（東本願寺）を興されました。





これにともない長浜城の旧地に移っていた当寺は、道場から、無礙智山大通寺と号する寺院として新たに発足することになりました。しかし、慶長十一年、内藤信成が長浜に移封され、城地が修築されることになったため、寺地を現在の地に移し伽藍をかまえることになりました。

大通寺発足当初は、本山より僧が派遣され、三郡の有力末寺が輪番に出仕動行していましたが、湖北教団の重要性をおもんじた大谷派本願寺第十三世の宣如上人により、寛永十六年（一六三九）三男靈瑞院宣澄殿が住職として入寺されることになりました。これを契機に当寺は、彦根藩主井伊直孝の援助を得て寺域の拡大をはかるとともに、本山から伏見桃山城の遺構と伝えられる、本堂や広間を譲りうけ、寺観の整備をはかりました。

ここに、当大通寺は、真宗大谷派の別格別院として、七千坪の境内で、名実共に当地方における信仰とその伝道との要として重きをなし、今日に至っています。

なお、毎年七月二日から十日まで勤修される夏中（夏の御文拝読）は、曳山まつりと共に湖北の二大行事であり、十月二十三日から、四日間行われる報恩講は、当寺の最大の仏事である。





梵鐘(県指定)

南北朝時代

もとは、若狭国多太寺のもので貞治二年(1363)の銘がある。

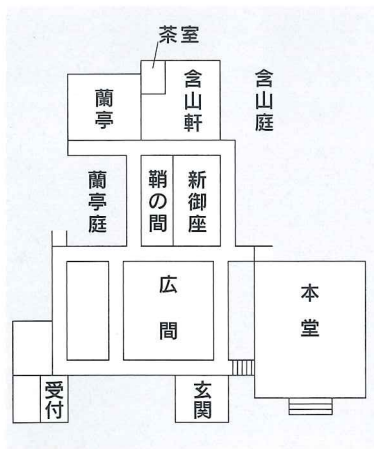


山門(市指定) 江戸時代

文化五年(1808)起工し、33年後の天保十一年(1841)落成した。総ケヤキ造りで、近世大型建築としては、県内屈指の名作である。

脇門(市指定) 桃山時代

旧長浜城の追手門と伝える。扉金具の裏に、天正十六年(1588)の銘がある。





本堂・阿弥陀堂(重文) 江戸初期建立
もと伏見城の殿舎であったが、大谷派本願寺が分立した際、御影堂として移された。その御影堂を承応年間(1652~4)に当寺に移して本堂とした。

玄関(重文) 江戸時代

宝暦十年(1760)に当寺の住職・横超院の内室であった彦根藩主・井伊直惟の息女数姫が祖師聖人五百年忌に建てたもので、豪華なかごは数姫輿入れの時に使われたものである。





大広間(重文) 江戸初期建立

書院造りの構成要件である、床、帳台構、違棚、附書院などを、上段の間に正面一列に並べているところに、この建物の特徴がある。本堂と同様に、もと伏見城の遺構で、極彩色で描かれた花鳥図や人物図は、桃山風御殿の豪華な趣をよく伝えている。

書院[新御座] (市指定)

上段障壁画の琴棋書画図は、狩野永岳筆。下段十二面の金地墨画梅之図(市指定)は、江戸時代後期に、京都画壇で活躍した岸駒の筆になる。剛健雄渾な筆力に岸駒の作風がよくあらわれている。





蘭亭(重文) 江戸時代
 円山応挙筆の蘭亭曲水宴図が
 描かれていることからその名が
 ある。



含山軒(重文) 江戸時代
 一ノ間は、狩野山楽筆の山水
 画、二ノ間には狩野山雪筆の山
 水画が描かれている。



含山軒庭園(名勝) 江戸時代
 枯山水の庭園で、東方に聳え、
 伊吹山を借景とすることから、
 山軒の名が生れた。

含山軒、枯木鳩図部分
狩野山雪筆



真宗大谷派長浜別院
無礙智山 大通寺

〒526-0059 滋賀県長浜市元浜町32ノ9
TEL 0749-62-0054

